

文化庁委託事業「平成24年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」  
日本の演劇人を育てるプロジェクト 「日本の劇」戯曲賞2012

最優秀賞受賞作

ナガイヒデミ／作

丹野郁弓／演出

おと

# 『水の音』

上演台本

2013年3月12日(火)～17日(日) 恵比寿・エコー劇場  
主催／文化庁・公益社団法人日本劇団協議会

スタッフ

作

ナガイヒデミ

演出

丹野 郁弓

美術

島 次郎

照明

前田 照夫

音響

秦 大介

舞台監督

川原 清徳

演出部

大平扶紀子

ドラマドクター

土田 英生

プロデューサー

菅野 重郎

制作

公益社団法人日本劇団協議会

協  
力

アール・ユー・ピー

LDH

クリオネ

劇団民藝

青年座映画放送

東京音響演劇研究所

バックステージ

ユータス

キャスト

宗内敦志

(50)

小須田康人

並木楓太

(50)

近江谷太朗

田島奈津

(50)

津田 真澄 (青年座)

## 第一場

ある東京近郊の町。吉祥寺のあたりか。夜。

駅の近くのカフェ「滯」(みお)の店内。ここは店長兼オーナーの宗内敦志が一人で切り盛りする店である。半地下にあり、舞台上手寄りに階段、それを上がったところに通路(廊下)がある。通路の上手側は店の入り口に、下手側は敦志の部屋に通じているらしい。通路の上には窓。

上手から舞台中央にかけてテーブル席がいくつもあり、下手寄りにカウンター席。灯りは絞っており、どことなく水の底を思わせる店内。時おり水滴の落ちる音、水の流れる音がしている。

夜は電車や踏切の音も入ってくるが、そううるさくはない。

敦志はカウンター席に両肘をつき、頭を抱える格好で座っている。

通路の上手側、入り口のドアを開けて並木楓太が携帯電話で話しながら入ってくる。黒いスーツに白いシャツ、営業靴。

楓太

はい。はい。わかりました。申し訳ありません。明日、朝イチで必ず伺います。は。はい。新製品のサンプルも、ですね。ビスコッティ。ありがとうございます。わかりました。必ず、ええ。では、明日。はい。失礼いたします。

お辞儀をしながら携帯を切り、階段を下りる楓太。  
敦志、振り向かず声かける。

敦志

終わったのか。

楓太

ああ。

敦志

いや。電話じゃなくて。

楓太

うん。

敦志

どうだった。

楓太

どうって。

敦志

いや。

敦志、目を伏せて立ち上がる。カウンターの中に入り、コーヒーを淹れ始める。

楓太、手近なテーブル席の椅子に営業鞆を置き、その横の椅子にどすと腰をかけ、黒いネクタイをを

める。脱いだ上着を、そばの椅子の背に放るよう  
に掛ける  
二人の間にはどことなくぎこちない空気が漂っ  
ている。

敦志 奈津は。一緒じゃないのか。

楓太 ああ。

敦志 寄るんだろ、奈津も、ここに。

楓太 そう言ってたけど。

敦志 けど。

楓太 何か怒ってて。

敦志 え。何を。

楓太 ワシのこと、ケダモノ、とか何とか。奈津のヤツ。

敦志 は。何だ、それ。

楓太 いや、ちよつと、沙希江の話してたら。相変わらず気

いキツイ奴じゃ、あいつも。

敦志 ケダモノ、て。

楓太 うん。

敦志 それで喧嘩して別々か、奈津と。

楓太 連絡入れとかないかん、て。

敦志 どこに。

楓太 高校。あいつの勤め先。

敦志 何で。

楓太 職員会議、抜けてきた言うて。さっきもちよつと遅れてきたし。

楓太、ネクタイをとってシャツの上の方のボタンをはずすと、営業鞆から扇子を出しぱたぱたあおぐ。  
敦志、無愛想に、

敦志 すぐに見つかったか、ここ。

楓太 ああ。駅の裏側じやて、奈津が。

敦志 何年振りだっけ、お前とは。

敦志、カウンターを出て、敦志の前にコーヒーを置く。

楓太、敦志を見上げながら半ば無意識にコーヒーカーップを口に運ぶ。

楓太 あつつつつつ。

敦志、思わず微笑。

敦志 慌てもん。相変わらずじゃ。

楓太 コーヒーが熱すぎるんじゃ。

敦志 当たり前じゃろ。淹れたてじゃ。

楓太、敦志の顔を見ている。

敦志 どうかしたか。

楓太 いや。

コーヒーをすすする楓太。ぼそつと、

楓太 ふう。旨いの。

敦志 ほうか。

敦志、カウンターの椅子に座る。

水の音。

楓太 一〇年と五カ月半ぶりじゃ。

敦志 何が。

楓太　ワシら。前に会うてから。  
敦志　えらいよう覚えとるの。

楓太　来てくれたろ、お前。お袋の葬式の時。

敦志　ああ。もうそがになるか、あれから。

楓太　わざわざ村に戻って。うちの寺に。

敦志　お袋さんには世話になったけんの。お前とこに遊びに

行きたんびに、うまいおやつ食わしてもらた。

楓太　何年になるんじや。この店開いてから。

敦志　十五年と七か月と十日。

楓太　お前こそよう覚えとるの。

敦志　自転車操業じゃけん、毎日。

楓太　ずっと一人か。

敦志　まあ、の。変わり映えせんよ。そっちは。

楓太　また生まれた。

敦志　猫か。

楓太　なんでじゃ。赤ん坊。

敦志　いつ。

楓太　つい、ふた月ほど前。この歳で、な。

と、頭をかく。

敦志 なんぼになった、今年。  
楓太 は。ワシらは五〇年前、生まれて以来の同い年じや。  
敦志 ばか。奥さんじや。  
楓太 五つ下。  
敦志 四十五か。  
楓太 何じや。  
敦志 いや。オメデトウ。  
楓太 ああ。おおごとじやけど。  
敦志 何が。  
楓太 生むんも。育てるんも。  
敦志 お前が生んだわけじゃないじやろ。  
楓太 ほうじやけど。おしめ替えたり風呂入れたり。  
敦志 お前がか。  
楓太 ワシじやてするぞ、それぐらい。  
敦志 ほー。  
楓太 夜中に泣くしの。  
敦志 猫か。  
楓太 ばか。相変わらずじやの。  
敦志 何が相変わらずじや。  
楓太 わざと話をずらすな。  
敦志 うつつたんじや、ガキの頃に、お前の癖が。

楓太

はん。

敦志  
楓太

昔はいつもお前が、こがなことしよったじゃろ。で？  
子育てはたいへんじゃつちゆう話じゃ。まあ、嫁さん  
は平気でぐうぐう寝よるけど。

敦志

疲れとるんじゃろ、昼間。

楓太

まあな。ちびが四人にもなるとな。

敦志

なんぼになった。今年。

楓太

ほじゃけん嫁さんは四十五。

敦志

(あきれて)あなのなあ。話をずらすな、て。子ども

楓太

上は中学生で二番目は小学校の四年。下は幼稚園。

敦志

何ぞ。にやにやして。

楓太

しがみついてくるんじゃ。

と、何かにすがりつくような格好をする。

楓太

こう、抱っこしてやると、な。

敦志

わっ、猫が、か。

楓太

またお前は。赤ん坊じゃ。

敦志

ああ。

楓太

温(ぬく)うての。子どもが生まれる度に、あれ、上  
の子もこんなに小さかったんじゃろか、と思うわけよ。

信じられるか、お前。

楓太、ポケットから男物の大判ハンカチを出す。

楓太 生まれたてなんか、これで包めるくらい小さいぞ。

敦志 まさか。猫じゃろ、それこそ。

楓太 いや、だいたいこんなもんじゃ。

と、ハンカチを広げ、右手で左の手首から下に巻き付ける。右手で左腕を抱えるようにして、

楓太 おーよしよし。

敦志 ばか。

楓太、コーヒーをすすする。水の音。

楓太 なあ。

敦志 何ぞ。

楓太 あるんじやろか、今でも。

敦志 何が。

楓太 あっこ（あそこ）のパーマ屋。滞農協の斜め前にあっ

敦志 忘れた。どうかしたか、それが。  
楓太 昔な。小学生の頃、お袋に連れて行かれて。シャンプー用の椅子に寝さされて。若い子おったろ。助手ゆうか、弟子ゆうか。  
敦志 知らん。ワシはいつも散髪屋じゃ、よろず屋の向いにあつた。  
楓太 その若い子が髪を洗（ある）てくれるんよ。 こう、迫つてきての。ぼよーんと。  
敦志 は。  
楓太 おっぱいが。ワシの顔に。  
敦志 裸で客の髪洗いよつたんか。  
楓太 なんてじゃ。ぴたぴたのTシャツにラインくつきり。  
敦志 普通目えつむるもんじゃ。  
楓太 ええ匂いがして。くらくらした。  
敦志 そいで。  
楓太 そんなだけ。お袋にまた連れて行けとも言えず。前通るとんびに匂い嗅いだ。  
敦志 しょうもなー。  
楓太 覚えてないか。農協の斜め前じゃ。  
敦志 あの、まさみ、とか、ひさみとかいう看板が出とつた

あそこか。  
ナオミ。ナオミ美容室。  
よう覚えとるの。  
敦志 娘の名前。ナオミで付けた。今度の、四番目。  
楓太 あ、そ。

敦志、カウンターの中に入ってグラスを磨き始める。

楓太 何でやめたんじゃ、会社。就職しとったじゃろ。

敦志 お前は何でやめんのじゃ。

楓太 ワシは。生活があるし。

敦志 それはあるぞ、一人でも。

楓太 退屈じゃないか、お前。都内とはいえこんなはずれの町におって。毎日毎日コーヒー淹れて。

敦志 別に。

楓太 何か、こう、欲しくないか。刺激。

敦志 お前じゃないか、退屈しとんは。

楓太 いや、まあ。満足はしとるよ、それなりに。

敦志 ふん。

楓太 ほじゃけど何か、の。だいぶ落ち気味じゃし、営業成績。

敦志 ああ。  
楓太 上司はがみがみ言うし。売れんときは売れんの。このごろ妙に、な。

敦志 うん。

楓太 会社の若い子おらがきれえに見えて。

敦志 危ないぞ、ちよつと。

楓太 ほじゃけどお前、してみたないか。大恋愛。

敦志 何ぞ、急に。

楓太 ワシはしたい。今、大恋愛がしたい。

と、わめく。

敦志 したけん、四人じゃろ、子どもが。

楓太 それはまあ、成り行きで、の。

敦志 (軽く) 疲れとるんとちがうか。

楓太 疲れとるよ、いつでも。

敦志 いっぺん検査でもしてみたら。

楓太 寝不足とかストレスとか言われるだけじゃろ。

敦志 スーパーで売りよるの、お前とこの会社の。

楓太 まいど。

敦志 買うたことないけど。

楓太 薄情もん。

敦志 菓子パンは好かん。

楓太 ふつうの食パンもあるぞ。菓子も。

敦志 ココナツ味は好かん。

楓太 「椰子の実」はただの社名じゃ。

敦志 株式会社「椰子の実パン」。全部ココナツが入っとん

じゃないんか。菓子もパンも。

楓太 全部じゃないワ。ほれ、今売り出し中の新製品。

と、鞆から菓子の袋を取り出し、敦志の方に差し出す。

楓太 自信作じゃ。

敦志、カウンターを出て、いちおう手に取ってみる。

楓太の向いに座り、袋を裏返して材料表示を見て、

敦志 やっぱり入っとるじゃないか、ココナツ。

楓太 ま、看板みたいなものじゃけん、うちの。

敦志 前から思いよったけど、変わった社名じゃの。

楓太 会社起こした先々々の社長が。

敦志 ココナツに目がなかつた、とか言うんじやろ。  
兵隊にとられて南方にやられて、部隊が全滅してジャ  
ングルに逃げ込んで。

敦志 「椰子の実」で命つないだ、とか。

楓太 そういう噂もあつたけど。

敦志 何じゃ。

楓太 実はその社長の奥さんが。好きじゃつた、いう話じゃ。

敦志 ココナツを、か。

楓太 歌。(朗々と暗唱)「名も知らぬ遠き島より、流れ寄る

椰子の実一つ」\*

敦志 ああ。て、節つけて歌えよ。

楓太 音痴じゃし。ワシ、ものすごう。

敦志 ああ、ほうじゃつたの。

楓太 (同じくメロディはつけないで)「故郷(ふるさと)の岸

を離れて、汝(なれ)はそも波に幾月」\*

敦志 ええけん、もう。

楓太 ほれ、これがうちのシンボルマーク。

菓子の袋を指差して見せる。

敦志 ラグビーボール。

楓太 ココナツじゃ。  
敦志 うーん。  
楓太 どうじゃ、一つ。新製品。

と袋を開け、中のビスコッティを一つ敦志に差し出す。

敦志 クッキーか。  
楓太 ビスコッティじゃ。  
敦志 ビスケット。  
楓太 ビスコッティ。  
敦志 同じじゃろ。  
楓太 違う。  
敦志 ココナツの味は口に合わん。

敦志、結局手に取らず、カウンターに入りグラス磨きに戻る。

楓太、袋をテーブルの上に置いて、

楓太 ま、それも一つの意見じゃな。末端消費者の。  
敦志 まったん消費者。

楓太 敦志 楓太

最末端じゃ。  
何じゃ、それ。

海渡った四国くんだりの、ちんまい町からまだ車を三十分も山の方に走らさな着かんような村出身のものことじゃ。

敦志

は。高校出て村離れるまで、ワシら二人ともずうっとおんなじ濡村村民じゃ。

水の音。

敦志

しばらく帰ってないんじやろ、村には。

楓太

ああ。もう親もおらんし。

敦志

帰りづらいか。

楓太

別に。

敦志

押し付けたんじやろ、弟に。本道寺の跡取りを。

楓太

嫌じゃったんじや、寺は。村も、の。

敦志

小学校も中学も村に一つだけ。三代、四代遡ったら、

楓太

そこら中が親戚どうし、か。

どこに遊びに行っても、本道寺の跡取り、言われて。思い切り暴れることもできんし。勉強ができてもできいでも何か言われる。女の子おと付き合うんも。

敦志  
楓太  
敦志

ははーん。  
何ぞ。

保育園の頃はサチコにミユキ、小学校に入ったらマミとユリ、二つ下のハナエ、中学校に上がったらすぐひとつ上のカスミ先輩。

楓太  
敦志

ようもまあ。

楓太

違う。誤解じゃ。その。ユリとハナエは。

敦志

はん。

楓太

ま、かわいいもんじゃろ。付き合うゆうても手えつなぐくらいのことじゃ。

敦志

ふん。

楓太

お前こそ。どこに行っても言われよつたる。

敦志

ワシは別に。

楓太

産婆さんとこの子、て。屋号みたように。

敦志

まあ、しゃーない。ひいばあちゃんから三代続いた産婆じゃけんの。

楓太

元気なんじゃろ、お袋さん。引退か、もう。

敦志

とつくじゃ。今はみいな病院で生むけんの。

楓太

昔は、じいさんも親父もワシらも、村中の者（もん）がお前とこに取り上げてもろた。あれ、お前は。

敦志 え。  
楓太 産婆さんが赤ん坊産むときは、誰が取り上げるんじや。  
敦志 そらばあちゃんに決まっとらい。  
楓太 ああ。

風が窓を揺らす音がたがたという音。敦志、カウンタ  
ーを出て階段を上り、通路に立って窓のブラインド  
を下ろす。通路の手すりを持ち、下に向かって、

敦志 まだあるんじやろ、お前の名づけ親。  
楓太 は。

敦志 本道寺の、山門脇の楓の木。木偏に風、楓（かえで）  
ちゆう字で楓太、か。

楓太 何ぞ、今さら。

敦志 三〇〇年いうたか、樹齡。

楓太 ああ。よう上ったの、ガキの頃。

敦志 遠くの家や田んぼまで見えるんが面白うて。

楓太 寺が高いところにあるけん。ま、木の上から見渡せる程  
度の村、ちゆうこっちゃ。

敦志 泣いたことがあったの。一回、奈津が。楓の木の上で。  
楓太 泣く。あの奈津が。まさか。お前じやろ、それは。

敦志 は。何でワシが。  
楓太 よう泣きよったじゃないか、お前。

敦志 人を女みたいに言うな。

楓太 プールにもよう入らいで、怖い、怖いて、びいびい泣いて。

敦志 小学校に上がる前のことじゃ。水が怖かったんは。

楓太 それでよう中学で水泳部に入ったの。

敦志 うるさい。

楓太 保育園のとき、お前が泣きよったら、奈津が「泣かれんよ、敦志」いうて、涙拭いてお前の手え引っぱって、そろそろとプールに入ったんじゃ。

敦志 忘れた。

楓太 嘘つけ。泳ぎも奈津に教えてもらたくせに。子ども用プールで。

敦志 ふん。

楓太 ワシなんか、奈津に背中蹴られてプールに落とされたこと、あったぞ。

敦志 お前が奈津を怒らすようなこと言うけんじゃ、全く。

楓太 ガキの頃から、飽きもせずに。

奈津の方が先に言うんじゃ、いつつも。さっきじゃて、何がケダモノじゃ。ふん。

敦志

楓の木の上で泣いたんは奈津じゃ。はじめて高いところまで上ったはええけど、下見たら急におとろしなって、下りれんようになったて。

楓太

はあ、あの奈津が、の。いつ。

敦志

小学校の一年か、二年か。ワシらは先に下りて。奈津が、さあ下りよ、と思て下見たら、足がすくんだらしい。

楓太

上るんは何ともなかったんか。

敦志

ほうじゃて。

楓太

ほいで、どしたん。

敦志

お前が、も一回上って奈津と一緒に下りてやったんじや。

楓太

忘れた。

敦志

あいつ泣きもて、ばかばかばか、フータの大ばか、いうて。

楓太

信じられん。箒やらモップやら振り回して男子を蹴散らしとつた、あの奈津が。

敦志

そりゃ、弱いもんをいじめるヤツがおったけんじゃ。

楓太

ほじゃけどお前、ガキの頃はほんとによう泣いたぞ。

敦志

小学校に上がる前の話じゃ、それは。プールに潜れるようになる前の、の。

敦志、階段を下りて椅子に腰かける。

敦志 楓の新芽の出始める頃じゃったの。

え。

敦志 プールの大掃除じゃ。藻や蛾の死骸なんか浮いた汚い水抜いて。

楓太 デッキブラシでゴシゴシゴシ、か。

敦志 お前、いっつも女の子に何かちよっかい出しよったじやろ。

楓太 ちよっかい。

敦志 水かけたり、デッキブラシでつついたり。

楓太 ワシ、そこまでガキじゃなかったぞ。

敦志 いっつも奈津が怒って、ブラシ振り上げて追わえよった。ばかばかばか、フータの大ばか、言うて。

楓太 忘れた。

敦志 嘘つけ。

楓太 四月は冷たかったの、水。

楓太 ああ。震え上がった。

敦志 二〇分も泳いだら唇紫色になった。

楓太 甘うて、うまかったの。

敦志  
楓太

お前、昔から話が飛ぶのう。  
沙希江が作ってきてくれた。保温ポットに入れて。口、  
喉、食道、胃。順番に温もってくる。あの感じ、忘れ  
られん。

敦志

ああ。ミルクテイ。うん。あなに切実にものを口にす  
る、て、ないな。最近。

楓太  
敦志

二日酔いの朝いちばんに飲む冷えた水。  
ばかばかばか、楓太の大ばか。

と、両手のこぶしでぼこぼここと楓太をぶつ真似。

楓太  
敦志  
楓太

何じゃそれ。  
奈津がようしよった、昔。  
やめい、気色悪い。

水の音。踏切の音。

楓太  
敦志  
楓太

泳ぐことあるか、最近。  
お前は。  
わかるじやろ。この腹見たら。

立ち上がって敦志の方に近寄りシャツをまくる。腹をポンポンと叩いたりする。敦志、楓太の腹の肉をつまむ。

敦志 わ。ちよつとは泳げよ。

楓太 忙しいて。お前こそ。

敦志 ワシは別に。メタボじゃないし。

楓太 ほつとけ。

と、座り直す。

敦志 ほじゃけど信じられへんの。

楓太 何が。

敦志 ワシら一日四千も五千も泳げたんじゃ、あの頃。

楓太 半分も無理じゃの、今は。

敦志 二、三百メートルじゃろ、せいぜい。

楓太 二、三〇メートルかも知れん。

水の音。

敦志 潜水の競争したことあったの。三年の、いつじやった。

楓太 シーズンの終わり、引退する直前。ワシが勝ったんじや。

敦志 勝ったんはワシじや。

楓太 ワシじや。

敦志 ワシじやって。

楓太 賭けんかったか、なんか。

敦志 ああ。西瓜。こう、大けな。(と、身振り。)

敦志 沙希江と奈津が買うて、うずんで(運んで)来たんじや、農協から。

楓太 そいでワシが獲得したんじや。プールで西瓜食うたん覚えとるぞ、ワシ。三年の夏に。

敦志 結局皆で分けたんじや、西瓜は。

楓太 ボケが始まっとんとちがうか。

敦志 こっちの台詞じや。

敦志、カウンターのの中に入り、グラスを磨く。

敦志 近々壊されるらしい。あのプール。

楓太 え。何で。

敦志 老朽化。また新しいのを作るゆう話じやけど。  
楓太 知らなかった。できて何年じや。あのプール。

敦志 半世紀。あと四年で。  
楓太 よう知つとるの。

水の音、ぼたぼたぼた、と。

敦志 姉ちゃんが。

楓太 え。

敦志 あ。いや、姉ちゃん。生きとったら、五十四じゃ。

楓太 ああ、ほうじやつたの。

敦志 あ。何で。

楓太 え。

敦志 したことあったか、姉ちゃんの話。

楓太 いや。

敦志 ほんなら。

楓太 うちの親父が、お前の姉ちゃんのこと、時々言いよつたけん。辛いけんの、子どもの葬式は、特に。

敦志 ああ、住職が、の。

水の音。ぼたぼたぼた、と。

敦志、カウンターの上の水差しを取って、楓太のコップに水を注ぐ。

楓太 奈津はよう来るんか、ここ。

敦志 開店してすぐの頃に、一ぺんだけ。

楓太 男とか。

敦志 いや。一人じゃった。

楓太 色気ないの、奈津も。あ。

敦志 え。

楓太 お前、どうじゃ。奈津。

敦志 どうて。

楓太 ま、二人とも一人じゃし。

敦志 どうかしたか、それが。

楓太 ええじゃないか、ちようど。

敦志 お前、な。

と、カウンターを出て楓太に近づく。

楓太 何じゃ。

敦志 気いつかんのか。

楓太 何じゃ。

敦志 奈津は。奈津はの。たぶん今もお前のこと、ずうつと。

楓太 そういや遅いな、あいつ。

敦志 ええワ、もう。

と、カウンターの内側に戻る。

敦志 楓太。お前、な。

楓太 何ぞ。

敦志 鈍いところあるぞ、昔から。

楓太 は。

敦志 鈍感なんじゃ。

楓太 誰が。

敦志 お前じゃ。

楓太 え。

敦志 気いつかんのじゃ、何もかも。

楓太 何。

敦志 昔からじゃの。村一番の大きな寺で何不自由のう育つ

て、のほほんとしとるんじゃ。

楓太 好きで寺に生まれたんじゃないぞ。

敦志 (さえぎって) 奈津はの。

楓太 奈津がどうかしたか。

敦志 いや。ほじゃけど沙希江は。

楓太 今度は沙希江か。

敦志 ええワ、もう。  
楓太 何じゃ。わかるように言え。

カウンターを出て、楓太のいるテーブル席の椅子を  
引き寄せ座る敦志。

敦志 楓太。  
楓太 ほじゃけん、何ぞ。  
敦志 お前。何で別れたんじゃ。  
楓太 は。  
敦志 何で。あいつと。  
楓太 あいつ。

水の音。

敦志 わかっとなるくせに。沙希江と。  
楓太 何ぞ、急に。  
敦志 同棲しとったんじゃろ。  
楓太 まあ、の。  
敦志 あいつが東京の短大を出るまで、二年も。  
楓太 そがな古いこと。

敦志 お前と。そのまま結婚でもしとつたら。

水の音。

敦志 変わつとつたかも知れん。

楓太 何が。

敦志 沙希江の。

楓太 沙希江。

敦志 あいつの、人生。

楓太 ワシのせいかな。ワシが悪い言うんか。

と、立ち上がる。

楓太 言えるんか、お前に。

敦志 は。

楓太 お前にそれが言えるんか。

楓太、怒って椅子を蹴る。

楓太 お前、何で行かんかったんじゃ、今日。ワシらと一緒に。

水の音

楓太 言うてみい。お前、お前こそ何で。  
奈津 (さえぎって) 楓太。

奈津がいる。通路上手側、階段の近くに。黒のスイ姿。

音楽。溶暗。

## 第二場

同じくカフェ漣の店内。  
中央のテーブル席に楓太と奈津。テーブルの上には二人分の水の入ったグラス。近くの椅子の上に奈津のバッグ。  
敦志はカウンターの中でコーヒを淹れている。  
奈津がふいにグラスをつかんで立ち上がり、楓太に水を浴びせかける。

奈津  
ケダモノ。  
楓太  
何ぞう。

と立ち上がる。

奈津  
さっきの話じゃ。  
楓太  
さっきの話。  
奈津  
ここに来る前。付き合い出したほんとのきっかけ聞いてみたら。  
楓太  
ケダモノ、とは何じゃ。

奈津 要するに、したんじやる、その、最初するとき、沙希江ちゃん。

楓太 何を。

奈津 何をて。最後まで、というか。

楓太 それはまあ。成り行きというか。

奈津 うわ。陸トレの最中にマネージャーと。道端の納屋の中で。

楓太 ほっとけ。お前も一緒に走りよったはずじゃ、あの時。

奈津 走りたない。そんなヤツと一緒に。

楓太 心配ご無用。高校からお前とは別々デス。

と、階段に座る。奈津は息荒く、

奈津 知っと思った、敦志。

敦志 いや、まあ。

と、カウンターを出て、奈津に水の入った新しいグラスを渡す。奈津、立ったまままごくごく飲んで、椅子にどすんと座る。敦志、楓太におしぼりを渡す。楓太、頭や肩などをばたばたと拭く。

奈津 何が。だいたい、あんた、二年のときはカスミ先輩と付きおうとったんじゃないん。

楓太 う。

奈津 いつつも一緒に帰りよつたら、部活終わってから。手えなんかつないで。

楓太 あれは。たまたま方向が一緒で。

奈津 ともかく。カスミ先輩から沙希江ちゃんに乗り換えたんじゃない。その雨宿りがきっかけで。

楓太 乗り換えた、て。人聞きの悪い。

奈津 ほんなら何。

楓太 相変わらずじゃの、奈津は。

奈津 何（なん）よ。

楓太 もうちよつと落ち着いてしゃべれ。こんなんが高校のセンセイしよるて。信じられんわ。

奈津 学年副主任デス、これでもいちおう。

敦志、三人分のコーヒーをテーブルに並べながら、

敦志 楓太はな。

奈津 （かみつくように）何。

敦志 流されたんじゃない。そのときのわか雨に。

奈津 敦志 楓太

は。大川の、橋渡ったところ、田んぼの中にあつた納屋じやろ。

敦志、楓太が座っていた椅子に腰かける。

奈津、無意識に、テーブルの上にあつた株式会社「椰子の実パン」のビスコッティを取り出し、がりりと齧る。次いでそれをコーヒーに浸したりしている。

楓太

ちようど秋から冬に変わる頃じゃ。みぞれみたいなんが降ってきた。体冷えてきて。そんなときはワシ、ガキのころからよう足が攣（つ）るんじゃ。それで、みなを先に行かして。納屋で雨宿りしよ思たら、伴走の沙希江が自転車停めて。何とのう一緒に納屋の中に入つて。ワシ、シャツが濡れて冷たかつたけん、脱いだら、沙希江が。こう、寄り添うてきて。温かこうて、柔らこうて、あいつ。

奈津 楓太 奈津

ばかばかばか。楓太の大ばか。聞きとない。お前、な。どーでもええけど、何とかならんか。何が。

楓太 その、菓子をコーヒーに浸けて食べる癖。  
奈津 固いんじゃないもん、これ。  
楓太 固さが値打ちなんじゃ、ウチの焼き菓子は。  
奈津 あんたとこの会社の。このクツキー。  
楓太 ビスコッテイ。  
奈津 ビスコット。  
楓太 ビスコッテイ。  
奈津 どーでもええけど。何かイマイチじゃね、これ。  
楓太 うるさい。そんな食べ方するけんじゃ。  
奈津 どう食べようと、消費者の勝手。  
楓太 ふん、末端消費者が。  
奈津 は。  
敦志 ほじゃけどそれじゃうちのコーヒーの味がわからん  
ようになる。ココナツで味付けすな。  
奈津 わかるて。はじめのひと口で。  
敦志 ほうか。どんな味じゃ。  
奈津 深うて静かで、ゆっくり語りかけてくる。  
楓太 はあ、さすが国語のセンセー。  
奈津 (軽く) うるさい。

楓太、テーブル席へ。コーヒーカップを片手に、

楓太 そのうちワシの淹れたコーヒーも飲ましちやる。

奈津 飲みたないわ。あんたの淹れたんなんか。

楓太 ワシじゃて割とうまいぞ。嫁さんもうまいゆうてくれる。

奈津 あ、そ。奥さんお上手じゃね。

楓太 ほじゃけん、うまいんはワシ。ワシのコーヒー。

奈津 いや。おだてて旦那を使うんが。

楓太 ほんとにうまいんじゃ。パンや菓子作つとると、飲み物にもうるさなるんじゃ。

奈津 営業じゃろ、あんたは。

と、奈津、わざとらしくゆつくりとビスコッティを  
コーヒーにつけてから食べる。  
楓太、それを見ながら、

楓太 全く。ガキじゃあるまいし。

奈津 ほつといて。

楓太 ワシらもう半世紀も生きとんぞ。

奈津 はあ。おばあさんじゃね。

楓太 わ。急にえらい素直じゃの。

奈津 そう思うもん、実際。マキちゃんておったろ。  
楓太 マキちゃん。  
敦志 村でうちの近所におったマキコか。  
奈津 そう。  
奈津 お盆にお墓参りに行ったら偶然会うて。小さい女の子  
楓太 うちの子と目と同じか。  
奈津 それが。孫じゃて。  
楓太 ・敦志 え。  
奈津 それも二番目の。  
楓太 ショックじゃ。

と、がつくりと落ち込む。

奈津 何もそこまで。  
楓太 ワシ、昔ちよつと好きじゃったんじゃ、マキコのこと。  
敦志 であー。  
奈津 ほんつと、誰でもええんじゃね。  
楓太 大昔。小学校の頃じゃ。  
奈津 ふふふふふ。  
敦志 うわっ。びっくりした。

楓太 何ぞ、気色悪い。  
奈津 思い出した。生徒がね。

敦志 お前とこの高校の。

奈津 うん、私が教えよるクラスの、一年の男の子。

敦志 お前、ほんとに勤まりよるんか。センセイなんか。

奈津 何よ。

楓太 箸振り上げて男子生徒追わえたりしよんじゃないんか。

奈津 は、何のこと。

楓太 気いつけいよ、新聞に載らんように。

奈津、無視して敦志に、

奈津 ほいでね。その一年の男の子がね。私のこと、おばあちゃん、て。

楓太・敦志 え。

奈津 なんかね、おばあちゃんに似とるんじやて、私が。

敦志 高校生の孫。

楓太 中学生くらいで結婚したらありうるか。

敦志 お前が言うな、て。

奈津 おととし亡くなったそうやけど、そのおばあちゃん。

でもちよつとね。  
と、くすりと笑う。

敦志

何ぞ。

奈津 嬉しかったな、何か。

敦志 おばあちゃん、て呼ばれてか。

奈津 その子がおばあちゃんのこと、すごく好きじゃった、

楓太 て気持ちがおぼわってきたんよ。

奈津 さすがに早すぎるじやろ。高校生の孫、は。

楓太 まあね。

敦志 うん。

奈津 雑誌にね。占い、て載っとろ。

楓太 えらい話が飛ぶな、お前も。

奈津 五十歳で大恋愛するでしょう、て。学生の頃読んだ雑

誌に、ね。

敦志 今年か。

楓太 大はずれじゃの、その占い。

奈津 人間て五十にもなって、まだ恋愛なんかするんか、と

敦志 思た、そのとき。

ワシは自分が五十になること自体、想像もできんかった。

楓太 中学を出てから、あつという間に三十五年か。  
奈津 信じられんワ。あんたらの顔見よったら、明日もまた  
楓太 プールで会いそうな気がするワ。  
楓太 そんなわけあるかい。ワシらもうシモの毛にも白髪の  
奈津 混じる年頃じゃ。  
楓太 ばかばかばか、楓太の大ばか。変なこと言うな。

水の音。

敦志 奈津だけじゃの。大学まで水泳続けたんは。  
奈津 下手なんよ。  
楓太 下手も下手。助けに飛び込もかと思たことあったで。  
奈津 溺れよるんか思て。お前のフリー。  
敦志 楓太のブレストこそ。思い出したら笑えてくるワ。全然進まんかったな、なんぼ水かいても。  
楓太 ほいでもこいつ、いちおうタイトルホルダーじゃ。  
奈津 三〇年も前の、の。  
敦志 ああ。  
楓太 高三の県大会。二〇〇フリーじゃったか。大会新。  
敦志 二年ほどは破られんかったらしい。ワシの記録。  
楓太 こいつも高校までは続けたけん。

奈津 沢高のキャプテンじゃろ、いちおう。  
楓太 いちおう、て。

楓太、少し憤慨。奈津、そしらぬ顔。  
敦志、とりなすように、

敦志 あ、奈津。お前覚えとるか。どっちが勝ったか。  
奈津 え。

敦志 ワシらがやった潜水の競争。  
奈津 いつ。

楓太 中三の、最後のシーズン。引退の直前。

奈津 ああ、あれ。私が勝った。

敦志 楓太は。

奈津 三人でやったじゃろ、競争。沙希江ちゃんが審判で。  
五〇メートル折り返したところで、二人とも上がったけ  
ん、私がおうひとかき稼いで、私の勝ち。

楓太 嘘じゃ。のう敦志。

敦志 ああ。ありえん。

奈津 ボケてきたん違う、二人とも。

楓太 それはお前の方じゃ。

奈津 (口調を変えて) 何でやめたん、楓太。

楓太

え。  
やめることなかったのに。

奈津

何を。  
水泳。そがに自信あったんなら続けたらよかったんじ

楓太

や、東京の大学でも。  
それは、まあ。忙しかったし。バイト。

敦志

同棲しとったけん、こいつ。沙希江と。  
知つとったけど。よう親にばれんかったね。

楓太

ま、行ったり来たり。半分同棲。

楓太、グラスの水を飲む。

奈津、ビスコッティをコーヒーに浸してがりりと齧

り、そのコーヒーをひと口飲んでりする。

敦志、カウンターの椅子に座る。

水の音。

奈津

ふつくらして見えたね、沙希江ちゃん。ほっぺたのあ

たり。

楓太

昔と変わらんかったの、写真も。  
かなり痩せとったんじゃけど。最後の方にお見舞いに行

ったときは。

楓太 がいようしたんじゃろ。

奈津 誰が。

楓太 専門の人が。顔きれえにしたり、着物を着せたり。

奈津 よう知つとるね。

楓太 寺の長男じゃけん。いちおう。

奈津 そういや、えらい立派なお数珠持つとつたね、あんた。

楓太 まあ寺の長男じゃけん。いちおう。

水の音。

奈津 少なかつたね。お参りの人。

楓太 また、それか。

奈津 お見舞いつてあんまり行けんもんじゃね、気になつても。

楓太 月に一、二へん、いうたか。

奈津 半年もあつたのにね、最後に入院してから。

楓太 喜んどつたよ、きつと。沙希江。

奈津 嫌がつてはなかつた思うけど。

敦志 喜んでなかつたんか。

奈津 よう言われた。何か用事のついでに来たん、とか何とか。帰るときも、お見舞いありがとう、でもないし。

楓太 あいつらしいの。  
奈津 何が。  
楓太 強がったんちがうか。同情されとない、ゆうか。  
奈津 何でそう思うん。  
楓太 何となく。  
奈津 何となく、か。  
楓太 ともかく奈津に知らせてもろてよかった。  
奈津 ほうで。  
楓太 後で知ったらもつと辛かったじやろな。  
奈津 ああ。  
楓太 やっぱり最後送ってやりたいし。  
奈津 行ってあげりやよかったのに。お見舞いも。  
楓太 無理じゃて、それは。  
奈津 何で。  
楓太 もうとつくに終わったんじや、四半世紀も前に。  
奈津 ほじゃけん。  
楓太 旦那に会う勇氣なかったし。  
奈津 会うたじやろ、今日。  
楓太 最後くらいは、の。  
敦志 挨拶したんか。  
楓太 焼香だけ済ませたら帰るつもりじやったのに。奈津に

引っ張られて、ひとことだけ。  
 せずに帰るわけにはいかんじやろ。  
 まあ、の。実際、人、少なかつたし。  
 うん。  
 寂しい感じじやつた。全体に。  
 そら、通夜じやし。近所や親戚中が集まって酒呑むわ  
 けでもなかる。  
 村じやあるまいし、ね。  
 沙希江は兄弟もおらんし。親戚もおらんと違うか。  
 あいつの親はどつか遠くの人じやつたの。  
 駆け落ちして村に來たて聞いた。  
 よう知つとるの、お前。  
 あ、いや。昔、お袋がちらつと。  
 産婆さんは村中の家のこと知つとるけんね。  
 そいで、あいつの親は、今は。  
 さあ。もう村にはおらん、て聞いたけど。  
 あがに子だくさんじやつたんか、沙希江は。  
 うん、七人。  
 もう大きかつたけどな。うちよりだいぶ。  
 下の二人はまだ中学生じやて。  
 あの子おは。

奈津 え。

楓太 あの一番上の女の子は。

奈津 あ、ああ。

楓太 ミオちゃん、て呼ばれよったか、旦那に。

奈津 あ、うん。

楓太 村の名あ付けたんじやの。

奈津 ほうじやね。

楓太 大学生か。

奈津 え。

楓太 あの長女。沙希江の。

奈津 ああ。ううん。二、三年前に高校出て働いてるて聞いたけど。

と、グラスの水を飲む。

楓太 短大出て、ワシと別れて。東京でOLしたんじやろ、沙希江。

奈津 うん、一年ちよつとかな。

楓太 ずっと連絡あったんか、奈津は。沙希江と。  
奈津 あつたり、途切れたり。

水の音。

奈津 電話かかってきて。半年前に。

敦志 沙希江からか。

奈津 ご主人から。最後の入院になると思います、いうて。

敦志 ああ。

奈津 敦志、あの。(言いかけてやめる。)

敦志 え。

奈津 ううん。

楓太 奈津。(と、止める。)

敦志 何ぞ。

奈津 うん。：初めはね。

敦志 え。

奈津 あ、いや。入院した初めの頃は、むくんでぼっちゃり

しとったんよ。沙希江ちゃん。

敦志 うん。

奈津 ほじゃけどだんだん痩せてきて。最後の三か月はホス

ピスで。ご主人は毎日毎日お見舞いに来て。ときには

一日に二回も三回も。

楓太 うん。

奈津 沙希江ちゃんも甘え放題ご主人に甘えて。あれ食べた

楓太 い、これ持ってきて、いうて。  
ほうか。

敦志 知り合いか、前から。

奈津 え。

敦志 その。沙希江の旦那と。

奈津 五年ほど前かな、一回家に遊びに行つて、そんな時に。

敦志 ああ。

奈津 年賀状出したら夫婦連名で返事がくるようになって。

楓太 さすがに筆まめじやの、国語のセンセー。

奈津 あんただけじゃ、年賀状もよこさんのは。

楓太 そういや毎年きとるの、奈津からは。

奈津 返事くらい書け。

水の音。

奈津 ふた月くらい前にね。

敦志 うん

奈津 たまたまご主人と行きおうて。

敦志 え。

奈津 立ち話。病院の廊下で。

敦志 ああ。

奈津 ずっと。三十分くらい。  
敦志 何を。  
奈津 え。  
敦志 何か言われたんか。  
奈津 あ。うん。  
楓太 何ぞ。  
奈津 いや。うん。楓太。  
楓太 何ぞ。  
奈津 あの、娘さんね。  
楓太 え。  
奈津 あの一番上の娘さんが。  
楓太 ああ。  
奈津 聞いたんじやて。ご主人に。中学生のとき。  
楓太 何を。  
奈津 うん。

水の音

奈津 お父さんの子じゃないの、私、て。  
楓太 敦志 え。  
奈津 あの、ミオちゃんて子が。

敦志 それで。  
奈津 お父さんの子だよ、て。ご主人は。

楓太・敦志 ああ。

奈津 ほじゃけど。あの娘さんがご主人に言うには。

楓太 え。

奈津 黙ってたて。お母さん、沙希江ちゃんは。

敦志 え。

奈津 お父さんの子じゃないの、て、娘さんに聞かれて。

敦志 それで。

奈津 ご主人は怒ったて、沙希江ちゃんに。

敦志 怒った。

奈津 何で「お父さんの子だ」って言ってやらないんだ、て。

水の音。

敦志 何で病院の廊下で、そんな。

楓太 そりゃ。

敦志 え。

楓太 沙希江の病室でするわけにもいかんじゃろ。

敦志 いや、そういうことじゃのうて。

奈津 溜まっとったみたい、ご主人、いろいろ。廊下で会う

敦志　　て、ぶわーって、すごい早口でいろんなこと。  
奈津　　ああ。まあ。  
敦志　　ほかにあるんか。  
奈津　　あ。うん。ううん。  
楓太　　例の。宗教か。  
奈津　　それもある。  
楓太　　お前ところにも来たか、勧誘ちゆうかオルグちゆうか、  
奈津　　手紙。  
楓太　　楓太とこも。  
奈津　　いや。  
楓太　　ほんなら何で。  
奈津　　風の噂じゃ。六、七年前か。村の同級生は大勢誘われ  
楓太　　たらしい。  
奈津　　教祖様と旅に出て一緒に幸せを見つけましょう。  
敦志　　そいで。  
奈津　　断ったよ、もちろん。  
楓太　　あの旦那も宗教の人か。  
奈津　　ううん。それは反対しとったみたい。ずっと。  
敦志　　ほうか。  
奈津　　宗教の人には知らせてないと思う。お通夜もお葬式

敦志 も。  
 敦志 何で。  
 奈津 ほじゃけん、ご主人、えらい嫌うとったけん、あの宗教。  
 敦志 ああ。  
 奈津 沙希江ちゃん、近所の人にも勧誘して回ったみたいで。  
 敦志 旦那がそう言うたんか。  
 奈津 沙希江ちゃんの家に行ったときね、五年前。  
 敦志 うん。  
 奈津 近所で道聞いたたら、何か反応が変で。  
 敦志 え。  
 奈津 孤立しとる感じじゃった。ようはわからんけど。友だちいうたら宗教関係の人しかおらんかったと思う、沙希江ちゃん。  
 敦志 ああ。  
 奈津 うん。  
 敦志 ほじゃけど。子どもは。  
 奈津 子ども。  
 敦志 いや。賑やかじゃろ、七人もおったら。  
 奈津 宗教のことや、いろんなことで留守がちじゃったみたいじゃし。ちよつと複雑じゃと思う、気持ちがあ。

楓太 あの子らには今日初めて会うたんか、奈津も。  
奈津 うん。病院でも会ったことはなかった。  
敦志 旦那は。  
奈津 最後はね。ほんと、優しかったんじゃけど。  
敦志 何年じゃった、結婚して。  
奈津 さあ。いつ入れたんじゃろ、籍。

水の音。

奈津 楓太は。いつじゃったつけ。  
楓太 え。  
奈津 結婚。  
楓太 ああ。  
奈津 沙希江ちゃんとは別れて。それから。  
楓太 六年か。就職して四年たってから。なかなか出来いで  
奈津 の、子どもが。  
奈津 (さえぎって) 楓太。  
楓太 何ぞ。  
奈津 何で、せんかったん、結婚。  
楓太 え。  
奈津 結婚。

楓太 した、て。嫁さんは短大出たてのOLで。  
奈津 (さえぎって) ほうじやのうて。  
楓太 は。  
奈津 沙希江ちゃんと。  
楓太 お前も言うんか、そがなこと。お前まで。  
奈津 え。  
楓太 合わんかったんじゃ、沙希江とは。  
奈津 は。何が。  
楓太 セックスじゃ。  
奈津 ばっ。ばか。ばかばかばか。楓太の大ばか。  
楓太 フラレたんじゃ、ホンマは。ワシが沙希江に。  
奈津 流されたんじゃろ、ほかの女に。  
楓太 う。  
奈津 え。ほんと。  
楓太 許してもらえんかった。必死であやまったけど。  
奈津 そら当たり前じゃ。  
楓太 ショックで結構ひきずったんぞ。何年も。  
奈津 自業自得。  
楓太 うるさい。

楓太のため息。

楓太

ほんとは、の。ワシもバイトきつうて。なんか、いろんなことで喧嘩ばかりになって。あれ以上いっしょにおろくことはできんかった、と思う。たぶん。

奈津

ああ。

楓太

ほじやけど今思たら楽しかった。あいつの声、今も思

奈津

い出して、の。ホンマ夢のようじや。

楓太

もし。

奈津

え。もしも、ね。

楓太

は。

奈津

別れんかったら、楓太と。変わっとったかも知れん。

楓太

何が言いたいんじや。

奈津

運命、というか。沙希江ちゃんの。

楓太

ワシか。ワシのせいじや言うんか。お前も。お前まで。

奈津

せい、とかじやのうて。

楓太

何ぞ。

奈津

楓太。

楓太

ほじやけん、何ぞ。

奈津

沙希江ちゃんは。沙希江ちゃんはね。

楓太

(いらだって) 奈津。

奈津

(さえぎって、だが静かに) 沙希江ちゃんはね。お見舞いに行くたんびに楓太のことばかり言いよった。あんな温かい人はおらん、て。この世で一番気持ち合う人じゃったのに、て。何か違うこと言いよつても、結局話はそのこにいつてしてもて。

楓太

(さえぎって) やめい。

奈津

楓太。

楓太

やめてくれ。

水の音。

楓太

敦志。お前。

敦志

え。

楓太

お前、お前こそ。沙希江と。

奈津

(さえぎって) 楓太。

楓太

何ぞ。

奈津

やめとき。

楓太

何で。

奈津

さつき、そう言うたら、あんたが。

楓太

ほじゃけど。

奈津

よかる、もう。今さら。

敦志 何。  
楓太 いや。

水の音。

奈津 敦志。  
敦志 何。  
奈津 何で来んかったん。今日。  
敦志 え。  
奈津 お通夜。沙希江ちゃんの。私らと一緒に。  
楓太 奈津。  
奈津 何。  
楓太 やめとけ。  
奈津 近くじゃのに、ここ。  
敦志 え。  
奈津 あの何とかメモリアルホールから。  
敦志 ああ。  
奈津 お葬式には行くんじやろ、明日。  
敦志 いや。  
奈津 何で。  
敦志 何でて。ずっと連絡とってなかったし、沙希江とは。

奈津 敦志。  
敦志 え。  
奈津 何でこの町にしたん。  
敦志 何。  
奈津 カフェ開くの。  
敦志 ああ。  
楓太 奈津。  
奈津 こんな駅の裏側に。  
敦志 それは。たまたま。  
奈津 ここからバスで三〇分くらいじゃろ。  
敦志 何が。  
奈津 沙希江ちゃんの家。  
楓太 敦志。見たんじゃ。ワシら、今日。  
奈津 沙希江ちゃんの、一番上の娘さんの、顔。

水の音。

奈津 敦志は沙希江ちゃんと。  
楓太 (同時に) お前がここに店出したんは。  
敦志 言うな。

目をそらす敦志。  
水の音、激しく。

奈津　いつ、から。  
敦志　え。  
奈津　沙希江ちゃんと。

水の音。

敦志　放つとけんかったじゃ。  
奈津　え。  
敦志　ものすごい荒れとって。  
奈津　何。  
敦志　あいつ。  
奈津　沙希江ちゃん。  
敦志　呑めんのに。酒に、溺れて。  
奈津　いつのこと。  
敦志　楓太が結婚したすぐ後じゃ。  
楓太　いっつもじゃ。  
奈津　え。  
楓太　あいつはいっつも。

水の音。

楓太 あいつは。

水の音。

楓太

いっつも、そこにはないもんを、どっか遠くの、あるんかないんかわからんもんを捜さずにおれんのじゃ、あいつは。(涙声)

水の音。

奈津

ほじゃけど、あの、ミオいう子おは。

敦志

ワシがそれを知ったんはだいぶ後じゃ。

水の音、長く長く。

踏切の遮断機が下りる音が、かすかに伝わってくる。

楓太、腕時計を見て、

楓太

いかん。

立ち上がり、鞆を引き寄せる。

敦志 帰るんか。

楓太 ああ。

敦志 泊れるぞ、上。一人くらい。

楓太 明日朝イチで得意先に行かんならん。嫁さん待ちよるし。

と言いながら鞆を開けて、その場で着かえ始める。

楓太 窮屈になっていかんワ、式服が。こがに腹出てきたら。

と、ズボンを脱ぐ。

目のやり場に困り、慌てる奈津。

奈津 わっ、ばか。ばかばか。楓太の大ばか。

と、楓太の背中あたりに乱暴に叩く。

楓太 いててて。お前なあ。

と、向き直る楓太。上は白いシャツで下はトランクス。

何よ。

奈津  
楓太

そがなけんいまだに貰い手がないんじゃ。沙希江はそがなことせんかったぞ。かわいいて、世話好きで、いっつも優しいて、うまい飯喰わせてくれて。あのふわつとしたオムレツ、もう喰えんのか思ったら泣けてくるわ。奈津もちよつとは沙希江を見習え。ばか。

奈津

(おさええた声で) 何でそがに沙希江ちゃんがええん。

水の音。

奈津

わけわからん。そなに美人ゆうわけでもないし、結局裏切られたんじゃろ、楓太も敦志も沙希江ちゃんの旦那さんも。ほじゃのどしてそがに沙希江ちゃんがええんよ。男の人に色目使うて。みいな、それでころつと騙されて。短大の頃じゃて、楓太に内緒で何べんも合コンに行った、て言うてた。楓太、知らんだけじゃ。二股も三股もかけられて。結婚してからも、その頃の

男と続いとつたらしい、てご主人が。中身なんかない  
じゃろ、沙希江ちゃんに。宗教にはまったんじやて、  
よっぽど自分に自信がなかったけんじや。そこでもや  
っぱり男ができて。ほいでますますのめりこんで。い  
つつもかわいこぶって、沙希江ちゃん。タイム取るだ  
けじゃったら、気楽なもんじや。ほじやのにみんな沙  
希江ちゃんばかりちやほやして。私なんかいつつも  
男子部員と同じだけ泳がされて。誰も気いなんか遣う  
てくれんかった。私じやて沙希江ちゃんみたいに大事  
にされたかった。ばかばかばか、楓太の大ばか。

だんだんと叫び声になってゆく奈津。

楓太  
敦志

奈津。  
奈津。

水の音。

楓太  
奈津

あ。気い遣うて欲しかったんか、お前。  
遣うとつたよ。

奈津 え。  
敦志 氣い遣うとつたよ。

水の音。

敦志 なるべく女じやと意識せんように。

水の音

楓太 なるべく仲間でいられるように。  
奈津 ……。

溶暗。音楽。

## 第二場

水の音。カフェ「澤」の店内。薄暗い。  
カウンター席に突っ伏してうとうととしている敦志。  
水の音、ぽたぽたぽた、と。そして川の流れる音。  
幼児のように目をこする敦志。

女性の声 あつし。

敦志 え。

女性の声 あつし。

敦志 あ。

女性の声 あつし。

敦志 姉ちゃん。

女性の声 あつし、泣かれんよ。

敦志 母ちゃんは。

女性の声 さつき、大川の傍（はた）の家のおいさんが呼びに来

た。「産婆さん、もう生まれそうなけん、来てつかあ

さい」、いうて。

敦志 ああ。

女性の声 あつし、泣かれんよ。ね。姉ちゃんと遊ば。

敦志 うん。  
女性の声 一緒に留守番しよう。

水滴が水道の蛇口からたらいに落ちる音。  
ぽったり、ぽったり。

女性の声 ええ音じゃろ。

ぽたり、ぽたり。ぽたり、ぽたり。

女性の声 あつしはこっちの方が好きなん。

ぽたぽたぽた、ぽたぽたぽた。  
そして川の流れる音。

女性の声 姉ちゃんはこれがいちばん好きじゃ。

敦志 姉ちゃん。どこにおるん。

女性の声 ここにおるよ。

敦志 嘘じゃ。おらん。

女性の声 おるよ。

敦志 姉ちゃん。

女性の声 え。  
敦志 今も、水の中におるん。

川の流れる音。

女性の声 もう生まれたよ。母ちゃん、もうつけ帰ってくるよ。  
敦志 姉ちゃん。どこにおるん。姉ちゃん。  
女性の声 あつし、姉ちゃんはね。いつでもおるよ。待ちよるよ。  
あつしのこと。  
敦志 あ。行かんとして、姉ちゃん、行ったらいかん。

川の流れる音。敦志、立ち上がる。階段の上に女性の影。

敦志 行くな。

溶明。  
階段の上に奈津がいる。

奈津 敦志。  
敦志 え。あ。

奈津 どうかした。  
敦志 え。あ。いや。

奈津、階段を下りてくる。

奈津 何。

敦志 いや。間に合うたんか。

奈津 何とか。

敦志 怒ったじやろ、楓太。送らいでええ、言うたのに、と  
か何とか。  
奈津 まあね。ほじゃけど。

奈津 と、手近の椅子を引き寄せて座る。

奈津 寂しかったんかも知れん。ほんとは。

敦志 何で。

奈津 おっ、って顔したけん。私の顔みたとき。

敦志 何じゃ、おっ、て。

奈津 顕微鏡で見たらわかる程度の嬉しさ、というか。

敦志 希望的観測っちゅうヤツじゃな。  
奈津 は。

水の音。

奈津

誰でも寂しいよ、夜の最終バスは。

敦志

戻って来んかと思た。いっしょに乗って行ったんかと。

奈津

え。方向違うし。タクシーで帰るワ、私は。

敦志

ほうか。

奈津

隣の町じゃし。

敦志

うん。

奈津

また電話かかってくるかも知れんし。学校から。

敦志

こんな夜遅うに、か。

奈津

滅多にないんじゃけど。今日は職員会議を抜けてきた

けん。

敦志

ああ。

奈津

しつくりいつてのうて。校長や教頭と。

敦志

お前が。

奈津

私だけじゃないけど。

と、テーブルの上のビスコッティをつまんで、がりと齧る。

敦志 コーヒー、飲むか、もう一杯。  
奈津 ありがと。

敦志、カウンターのの中に入り、コーヒーを淹れ始める。

奈津、少し笑って、

敦志 なんぞ。

奈津 敦志、子供の頃、コーヒーなんか飲んだことあった。

敦志 ない。

奈津 私も。インスタントはあったけど。お客さん用で。

敦志 どの家もほうじやったね、澤村は。

奈津 ほじゃけど今は敦志は何とカフェのオーナーで。

敦志 うん。そういや可笑しいの。

奈津 バスが来るまでちよっと時間あって。楓太に聞いたらね。

敦志 何を。

奈津 何でパン屋に就職したん、いうて。

敦志 ああ。

奈津 中学の頃、よう練習見に来てくれた先輩おったる。

敦志 先輩。男。

奈津 うん、卒業生。あの、学校の前のお店の。  
敦志 ああ。ワシ、嫌いじゃった。  
奈津 何で。  
敦志 若いのにぶ厚い眼鏡かけて。何か偉そうにして。顧問でもないのに。  
奈津 優しいところもあったよ。私らにパンくれたろ、時々。練習終わったら。  
敦志 残りもんじゃないんか、店の。  
奈津 ほじゃけどすごい楽しんじゃった。アンパンとかジャムパンとか。  
敦志 ほいで楓太はパン屋を目指したんか。  
奈津 決め手はそれじゃった、て。なんぼか内定とったあとで。  
敦志 (さえぎって) ええんか。  
奈津 何が。  
敦志 ほかに言うことがあったんと違うんか。  
奈津 え。  
敦志 パンがどうこうじゃのうて。  
奈津 何のこと。

敦志、奈津のテーブルにコーヒーを置いて、座る。

敦志 好きなんじゃろ、楓太のこと。ガキの頃からずうっと。  
奈津 何で。  
敦志 わかるて。長い付き合いじゃ。  
奈津 したことなかる、そがな話。

と、うつむき、ビスコッティをつまんで、噛み砕く。  
がりり、がりりと音が響く。  
奈津、コーヒーを啜り、見回して、

奈津 プールの底みたいじゃね、ここ。  
敦志 プールの底。  
奈津 あのプール、ね。  
敦志 うん。  
奈津 珍しいよね。  
敦志 え。何が。  
奈津 私らの年代で、あんな田舎の学校に立派なプールがあつたんは。  
敦志 ああ。  
奈津 ちやんと二十五メートルで六コース。スタート台付き。

敦志 小中学校共同で使いよったけどな。  
 奈津 夏休みなんか、毎日泳ぎに行ったね。  
 敦志 お前は楓太について行ったんじゃない。  
 奈津 小さい頃はね。家近かったし。  
 敦志 水泳部も、楓太が入ったけん、か。  
 奈津 好きじゃったし。  
 敦志 うん。  
 奈津 いや、泳ぐんが。  
 敦志 ああ。  
 奈津 何となく水泳部、かな。  
 敦志 ワシは中学まで、楓太も高校まででやめたのに、奈津  
 奈津 は。  
 敦志 途中でやめるん下手じゃけん。何となく大学まで続け  
 敦志 た。タイムは全然じゃったけど。  
 敦志 泳ぐことあるんか、今も。  
 奈津 忙しいて、ね。  
 敦志 学年副主任、いうたか。  
 奈津 今年是一年生の担当で。担任のクラスもあるし。  
 敦志 次は主任、ほいで教頭か。  
 奈津 いや。教頭はないよ。  
 敦志 何で。

奈津 なりたいと思わんし。  
敦志 何で。  
奈津 考えた。お見舞いに行くようになって。  
敦志 沙希江の。  
奈津 うん。  
敦志 考えたて、何を。  
奈津 残りの時間。  
敦志 ああ。  
奈津 忙しい忙しい言いよるうちにほんとおばあさんになるけん。  
敦志 ほうじゃの。  
奈津 体動かしたい、て思った。スポーツしたい、て。ひどいヤツじゃね、私。  
敦志 は。何で。  
奈津 沙希江ちゃんのベッドの横で、行きたんびに痩せていく沙希江ちゃん見て、そう思った。  
敦志 ああ。  
奈津 顔立ちも変わってしもて。骨と皮みたいになって、沙希江ちゃん。亡くなる前の日に、ご主人がメールで知らせてくれて。ほかに友だちもいませんからって。飛んで行ったら、もう話もできんようになって。で

奈津 敦志 奈津 敦志 奈津 敦志 奈津 敦志 敦志 奈津

敦志。何。  
来てくれる。  
え。どこに。  
お見舞い。  
誰の。  
私の。  
お前の。  
うん。  
お前。  
え。

水の音。

もあなたが来てくれて嬉しそう、だって。声でわかっ  
たんだと思います。私にはもう表情も見分けられ  
なかったけど。ご主人はずっとベッドのそばに座って、  
沙希江ちゃんの頬や頭を撫でて。沙希江ちゃん、もう  
口はきけんかったけど、何か一所懸命、ご主人に訴え  
よった。次の日、メールがきた。亡くなったって。そ  
れがおとといのこと。

敦志 悪いんか、どっか。  
奈津 あ。いや。もしも、の話。  
敦志 もしも。  
奈津 もしも私が重い病気になったら。  
敦志 何じゃ。  
奈津 何じゃ、て。  
敦志 びっくりするじゃろ。  
奈津 何が。  
敦志 いや。  
奈津 心配してくれる。  
敦志 当たり前じゃろ。  
奈津 ほんなら来てくれる、ね。お見舞い。  
敦志 生きとつたら。  
奈津 は。  
敦志 そんなに、ワシが生きとつたら。  
奈津 何、何よ。どっか悪いん、敦志こそ。  
敦志 まあ。  
奈津 え。え、病院に行つたん。  
敦志 いや。別に。  
敦志 何。

奈津 ちやんと行って。病院。  
敦志 何で。  
奈津 何で、て。  
敦志 何でもないよ。  
奈津 嘘。  
敦志 ほんと。  
奈津 ほんとに病気なん。  
敦志 いや、ほじゃけん。病気、じゃのうて。  
奈津 ばかばかばか、敦志の大ばか。もうわけわからん。  
敦志 こつちがわけわからんよ。  
奈津 敦志。  
敦志 何。  
奈津 敦志。  
敦志 ほじゃけん、何。  
奈津 死なんといて。  
敦志 え。  
奈津 死なんといて。私より先に死なんといて。  
敦志 わからんよ、そがなこと。  
奈津 約束して。  
敦志 約束はできんけど。  
奈津 約束して。後で破ってもええけん。約束は、して。

敦志 どうかしたんか。  
奈津 え。  
敦志 急に、そがな。  
奈津 怖なったんよ。怖かった、さつき。  
敦志 何が。  
奈津 怖うてたまらんかったんよ。  
敦志 ほじゃけん、何が。  
奈津 残されるんが。一人で。  
敦志 ああ。

水の音。

奈津 敦志は。  
敦志 え。  
奈津 怖ない。  
敦志 何が。  
奈津 (カウンターの内側を指して)そこに立つとることが。  
敦志 は。  
奈津 ずっと一人で。これからも。  
敦志 ああ。  
奈津 ほいで一人で死ぬことが。

敦志 うん。  
奈津 怖ない。  
敦志 うん。ほいでも。  
奈津 え。  
敦志 待ちよつてくれる人、おるし。  
奈津 (少し力なく) ほうなん。  
敦志 うん。  
奈津 (力なく) どこに。その人。  
敦志 あの世。  
奈津 は。  
敦志 待ちよる。  
奈津 誰が。  
敦志 姉ちゃん。  
奈津 え。  
敦志 うん。  
奈津 敦志、姉ちゃんおったん。  
敦志 うん。  
奈津 あの世、て。  
敦志 さつき言うたじゃろ、お前。  
奈津 え。  
敦志 何でうちの村にあんな立派なプールあつたんか。

奈津

言うたけど。

敦志

大川で泳ぎよったらしい、プールができるまでは。

奈津

ああ、聞いたことがある。

敦志

聞いたことないか。溺れて死んだ子がおるて。

奈津

え。いつのこと。

敦志

ワシらが三つのとき。

奈津

初めて聞いた。誰が、溺れたん。

敦志

姉ちゃん、ワシの。溺れて死んだ、川で。

奈津

え。

敦志

小そうて、ワシ。よう覚えてないんじゃけど。

奈津

ほうじやったん。

敦志

うん。

敦志

姉ちゃんが溺れて、村はプールを造ることに決めたん

奈津

知らんかった。

敦志

奈津。

敦志、奈津の方に椅子を寄せる。

敦志  
奈津

行くな。  
え。

敦志 どこにも行くな。

水の音。

敦志

人が大勢うちに来て。たぶん葬式の記憶じゃ。それまでおった姉ちゃんがおらんようになって。夕方になっても夜になっても帰って来ん。お袋は毎日泣いて。姉ちゃんのこと、お袋に聞いたらいかん、いうんはわかったけど。ワシは、ずーっと待ちよつた。次の日もその次の日も。姉ちゃんのこと。おるとこはわかつた。水の底じゃ。

奈津

ゆっくりと照明が落ちる。  
水の音、ぼったり、ぼったり。

敦志

姉ちゃん。ぼくが。ついて行つたけんじゃろ。一緒に遊んで、いうて。泣いて、追わえていった。姉ちゃん、友だちと遊びたかったのに。ちよつとごまかすつもりで、大川に入ったんじゃろ。

ぼたり、ぼたり。ぼたり、ぼたり。川の流れる音。

敦志

母ちゃんに絶対行くな、言われたけど、ぼく、小学校に上がってから内緒であの川に入ってみた。浅いつもりで入ったら、急に深なっとなつて。

奈津

敦志、敦志。

水の音、大きくなる。やがて次第に小さく。店内次第に明るく。

奈津

敦志。

敦志

え、ああ。

奈津

どうかした。

敦志

あ、いや、うん。知つとるか。

奈津

え。

敦志

プールに頭まですっぽり浸かるじゃろ。

奈津

うん。

敦志

目え開けて水面を見上げたら。

奈津

何。

敦志

人の顔、みたいなもんが揺れよる、水面に。

奈津

わ。お化けとか。

敦志 お前の場合はそうかもな。  
奈津 は。

敦志 姉ちゃん。

奈津 敦志。

敦志 そこに姉ちゃんがおる、と信じとった、小さい頃は。  
奈津 ああ。

敦志 ほじゃけど、ある時、気づいた。  
奈津 え。

敦志 自分の顔じゃった、それは。

奈津 敦志。

敦志 自分の顔が映って揺れよるんじゃ。水面に。やったことないか、奈津は。

奈津 初めて聞いた。というか、今なんかヒドイことも言われたような。

奈津、ビスコッティを齧る。がりり、がりりという音。コーヒーを飲む。

敦志 よう似とったんじゃ。

奈津 え。  
敦志 沙希江が、タイムよみ上げる声なにかトローンとした

声じゃったろ。  
似とるて、誰の声と。

奈津

姉ちゃん。

敦志

声は、覚えとるん、お姉さんの。

奈津

ぼんやりと。

敦志

どんな声。

敦志

水が、流れるような。

水の音、ぽたぽたぽた、と。

敦志

沙希江はの。水の音が好きじゃった、て。プールの。

大川のはたじゃったろ、あいつの家。生まれる前から

聞きよった気がする、て。お母さんのおなかの中で。

奈津

ああ。聞こえんけど、ね。水の音。泳ぎよるときは。

敦志

ほじゃけんマネージャーになったんじゃ、沙希江は。

選手じゃのうて。

奈津

ああ。

水の音、長く。

奈津がビスコッティを齧る音がそれを遮る。がりり、  
がりり。

敦志 楓太。楓太のヤツ。

奈津 え。

敦志 沙希江も沙希江じゃ。

奈津 敦志。

敦志 何で。何で楓太なんじゃ。沙希江。

奈津 敦志。

敦志 まだ中学生じゃったのに、沙希江は。奈津。

奈津 え。

途中でやめるんが下手じゃて、下手にもほどがあるじやろ。どこがええんじゃ、楓太なんかの、どこが。

奈津がビスコッティを齧る音。がりり、がりり。

敦志 軽うて女好きで。あがなヤツのどこが。

奈津がビスコッティを齧る音。がりり、がりり。

奈津、胸ぐらを掴まんばかりに、ぐいと敦志に近づく。

二人とも、叫ぶというより、抑えた声で。

敦志こそ。  
え。

奈津 下手くそじゃ、途中でやめるんが。敦志こそ、沙希江ちゃんのこと、ずっと忘れられんかったくせに。

敦志

奈津 羨ましかったんじゃろ、楓太が。

敦志

何のことじゃ。  
わかつとつたよ。

奈津

何が。

敦志

奈津 中学の頃。したい、でずっと思いよつたんじゃろ、沙希江ちゃんと。大人になって、やっと思ひ遂げても結局沙希江ちゃんに振られたくせに。こんな、沙希江ちゃんの家に近いとこに店出して。未練たらたら。娘さんに、あの敦志にそっくりなミオちゃんに、名乗る勇氣もないくせに。

言うな。

敦志

奈津 このプールの底みたいなとこに潜って、ずーっと待つ気じゃったん、敦志は。沙希江ちゃんや、ミオちゃんを。お姉さんのとこに行く日まで。

黙れ。

敦志

奈津 来んよ、だあれも。ミオちゃんは、ただ待ちよつても、

来るわけない。沙希江ちゃんは敦志の姉ちゃんじゃないよ。それにもうこの世界にはおらん。もう死んでしまったんじゃない、待っても来ん。沙希江ちゃんも、姉ちゃんも。

敦志

黙れ。ワシは。ワシはただ。(独り言のように)許せんのじゃ、姉ちゃんを行かせてしもた、自分のことかと、顔を背ける。

奈津

そいで、自分を閉じ込めたん、こがなプールの底に。

と、敦志の正面に回り込み、顔を近づける。  
敦志、やはり顔を背ける。

敦志

守れんかった、姉ちゃんのことを。ほじゃけん守りたかったんじゃない。沙希江やミオを。ほじゃのに。

水の音。

奈津、敦志に、というよりは自分自身に向かって、

奈津

プールの底に潜っとるだけじゃったら、守れんよ、だ

あれも。

と、敦志から離れる。  
ビスコッティを噛み砕く音。がりり、がりり。

奈津  
（ふいに涙声）私じゃて、私の方こそ。守って欲しかった、ずっと。

敦志  
（虚をつかれて）奈津。  
羨ましかったんじゃない、私。沙希江ちゃんが羨ましい。

がりり、がりり、と音が響く。がりり、がりり。  
奈津の携帯が鳴る。バッグを引き寄せると、携帯を出し手のひらでさっと涙をぬぐう。

奈津  
はい、田島です。

勤務先の高校から。学校に戻るように、と。

奈津  
はい、ええ。そうですか。わかりました。戻ります。  
と、携帯を切る。

敦志 学校から。

奈津 うん。

敦志 こんな遅うに、呼び出しか。  
奈津 会議、まだ終わらんらしい。

携帯をバッグに入れ、バッグを持って立ち上がる。

敦志 行くんか。

奈津 うん。

と、コップの水をごくごくと飲み干し、階段を上りかける。

しかし途中で足が止まる。背中を見せたまま、

奈津 敦志。

敦志 え。

奈津 行くな。

敦志 え。

奈津 行くな。

と、振り向いて、

奈津 て、言うて。も一回。私に。

敦志 あ。

奈津 私だけに、言うて。

奈津、駆け下り、敦志を揺さぶる。

奈津 行くな。

敦志 うん。

奈津 行くな。

敦志 行くな。

奈津 沙希江ちゃんじゃないよ、私は。

敦志 うん。

奈津 お姉さんでもない。私は私じゃ。

敦志 わかつとる。

奈津、敦志に抱きつく。

敦志 奈津。

奈津 うん。

敦志、奈津から体を離し、奈津を両腕で揺さぶって、

敦志　ワシは楓太じゃないぞ。

奈津　わかつとる。ほじゃけん、敦志。

敦志　うん。

奈津　言うて。ここにおる、私に。

敦志　行くな。奈津。(強く)行くな。

二人、抱き合う。

敦志　(強く)泊っていけ。

溶暗。

(終わり)

\*印は島崎藤村「椰子の実」より。